

コーヒーハウスの権力論

— 18 世紀イギリス公共圏と小説の誕生 —

吉田直希

コーヒーハウスは 17 世紀末から 18 世紀にロンドンで流行した特異な公共空間である。コーヒーというエキゾチックな飲み物を提供するこの建物の中では、タバコの煙が立ち込め、新聞や雑誌を手にした男たちが、時に大声を上げて時事問題について議論し、また片隅では耳打ち話をしながら商取引を行っていた。

コーヒーハウスの歴史については、すでに多くの研究がなされている。¹ 小林章夫によれば、コーヒーハウスの最大の特徴は多様な人々の混在性にあった。

初期のコーヒー・ハウスには、身分・職業、上下貴賤の区別なく、どんなぼろを着た人間だろうと、流行の衣装に身を固めた伊達男だろうと、誰でも店に出入りすることができた。いわば一種の「人間のくるつば」的性格を持っていたのである。だからこそ、十七世紀末から十八世紀初頭にかけて急速に栄え、活気溢れる場として繁栄を誇ったわけだが、その一方では怪しげな人間が数多く出没するという点で、批判の対象ともなったのである。²

¹ コーヒーハウスの公共性に関しては、次の 2 つの論文が特に重要である。Steve Pincus, “‘Coffee Politicians Does Create’: Coffeehouses and Restoration Political Culture,” *The Journal of Modern History* 67 (1995): 807-34. Lawrence E. Klein, “Coffeehouse Civility, 1660-1714: An Aspect of Post-Courtly Culture in England,” *The Huntington Library Quarterly* 5 (1996): 30-51.

² 小林章夫『コーヒー・ハウス — 18 世紀ロンドン、都市の生活史』（講談社、2000）50.

「人間のくるつぼ」, すなわち社会階層を縦断する雑種性が, コーヒーハウス繁栄の原動力である。ここでは社会的地位は表面上無視され, 原則的に皆が対等の立場であった。コーヒーハウスは, 表向き全ての人間に開かれた自由な理想世界で, 近代的「公衆」はここに誕生した。周知のように, ユルゲン・ハーバーマスは, コーヒーハウスの没階層性がヨーロッパ近代の主体形成に与えた影響を論じている。³

本稿はまず, ハーバーマスの議論にしたがって, コーヒーハウスの公共性をその開放性という観点から考察する。次に, 1665年のペスト流行が公共圏に与えた影響を検討する。その際, ハーバーマスの議論では抜け落ちているジェンダー, セクシュアリティの視点を取り上げ, 18世紀の「公共性」概念を開放性だけでなく, ある種の閉鎖性から再検討する。ペストに対する権力の新たな仕組みによって, この二つの矛盾する性質が公共圏に生じたことを確認し, 最後に公共圏における「小説」誕生の歴史性について論じてみたい。

1

ハーバーマスは公共圏の階層縦断性について次のように述べている。

夕食会とサロンと喫茶店とでは, その会衆の範囲や構成において, 交際の様式において, 議論の雰囲気において, 主題的関心において, きわめて異っていたが, とにかくそれらはすべて, 傾向上は私人たちの間の持続的討論を組織化するものである。したがってそれらには, 一連の共通な制度的基準がある。まず第一に, 社会的地位の平等性を前提するどころか, そもそも社会的地位を度外視するような社交様式が要求される。⁴

³ ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷貞雄他訳(未来社, 1973)。

⁴ ハーバーマス 55-56。

すでに見たように、コーヒーハウス(「喫茶店」)には、さまざまな階級の人々が集い、混じりあい、意見を交わした。そこでは対等・平等が原則であった。貴族、聖職者、文人、商人、馬丁、船員。誰でもわずかな金を払えば、コーヒーを飲みながら、新聞を読んだり、会話を楽しんだり、新たな出会いを経験することができた。

コーヒーハウス内でのさまざまな活動について、川北稔は、サミュエル・ピープス、ジェイムズ・ボズウェル、そしてジェイムズ・ウッドフォードのコーヒーハウス体験を紹介している。⁵たとえば、ピープスの場合、投獄されているシティ選出議員の釈放問題やバロン中佐のトルコの政治制度についての話、詩人ドライデンに遭遇した体験等が彼の日記には描かれている。また、ピープスが貿易商人と一緒にコーヒーを飲む場面が多いことから、コーヒーハウス内ではさまざまな経済情報のやり取りが盛んであったこともわかるだろう。ロイズ保険組合のそもそもの始まりはコーヒーハウスであった。まさに、コーヒーハウスの「会衆の範囲や構成」は多種多様であったといえよう。この出会いの異空間は、現実の社会階層秩序に基づく権力・権威を一時的にはあれ、無効化していたのである。

もちろん、民主的な「公衆」の理想が、この時期の英国社会全体で実現したわけではない。ハーバーマスは、このような理想世界が「理念として制度化され、したがって客観的建前として掲げられ、そのかぎりでは、実現はされなくても尊重されるようになった」点を重視している。⁶コーヒーハウスの歴史的重要性は、「公共性」の実現ではなく、その理想化にある。したがって、コーヒーハウスの最大の魅力は、完全なる階層の否定にあるのではなく、没階級性という反社会性を擬似体験できることにあったといえるだろう。

では、「理念として制度化」された空間に一時的にせよ参加していた公衆は

⁵ 川北稔「開かれた社交・閉じられた社交 コーヒーハウスからクラブへ」川北稔編『結社のイギリス史——クラブから帝国まで』(山川出版社、2005) 86-105.

⁶ ハーバーマス 56.

どのくらいの規模であったのだろうか？

スティールとアディスンが一七〇九年に『閑話』(Tatler)の第一号を發刊したときには、喫茶店はすでに数多くなり、そこへ出入りする客のサークルも非常に広がっていたので、この幾千のサークルの連帯は、もう新聞によらなければ維持することができなくなっていた。同時にこの新しい雑誌は喫茶店の社交生活に密接に織りこまれていたので、その二、三の号をもとにしてこの社交生活そのものを再現できるほどである。⁷

コーヒーハウスは一つひとつが社交の場であったが、それぞれが相互に「連帯」し、より大きな公共圏を形成していた。さらに、コーヒーハウスが、新聞、雑誌を通して、さまざまな議論を伝えるメディアとして機能するようになると、その開放性はますます高まり、公共圏は一段と拡大する。つまり、どんなに小さな集団もさらに大きな公共圏を前提として(するかのよう)に機能していたのだ。このことをハーバーマスは次のように述べている。

そのつどの公衆がどれほど排他的であったにしても、それが全く扉を締めきって徒党として結束することは決してありえなかった。なぜなら公衆はいつもすでに、読者や聴衆や観客として財産と教養さえあれば、市場をつうじて討論対象を入手できるすべての私人から成る、一層大きな公衆のただなかに身をおき、その中で自己を理解していたからである。⁸

このように「大きな公衆」が想定されるようになると、地域社会を越えて、後の国民国家といった大規模な公共圏も原理的には誕生することが可能となる。ハーバーマスの議論において重要なのは、公共圏がコーヒーハウスとい

⁷ ハーバーマス 63.

⁸ ハーバーマス 57.

う施設の内部で作られながらも、つねにその外側に大きな「公共圏」を生み出していったという、その拡張する力にある。

2

では次に、17世紀後半のコーヒーハウス体験をもとに、その開放性ではなく、閉鎖性について検討していきたい。ピープスのコーヒーハウス体験は、1665年のペストによって一時中断されてしまう。これについて川北は中断の経緯を次のように説明している。

ピープスの場合、日記の第六巻、つまり一六六五年になると、オランダから上陸したペストが猖獗を極め始め、人の集まるコーヒーハウスは敬遠されるようになって、「王の頭」など、外食の場としてのタヴァーンはなお登場するが、コーヒーハウスの記述はほとんどなくなる。一六六五年一月二十二日、「取引所裏の王冠亭へ戻って、そこでグレシャム学寮の会合。ペスト以来はじめてだ。」⁹

このようにペストの流行はコーヒーハウスに甚大な影響を与えた。ただし、それによってコーヒーハウスが一気に廃れてしまうことはなかった。むしろ、その逆に、コーヒーの医学的効用に注目が集まり、繁盛する店も多かった。¹⁰ここで、ペストの流行をきっかけとして導入された新しい監視、取り締まりのシステムが、コーヒーハウスに、開放的「自由」の概念とは異なる、閉鎖性をどのようにもたらしたのかを見ていきたい。そのような特徴に注目することで、ペストと公共圏との関係を、別な観点から検討することが可能とな

⁹ 川北 95.

¹⁰ コーヒーの医学的効用については、Richard Bradley, *The Virtue and Use of Coffee* (London, 1721) を参照。

る。

実際のペスト発生に対して取られた監視の様子をダニエル・デフォーは『ペスト』の中で次のように描写している。

〔監視人〕

すべての感染家屋には二名の監視人を置く必要がある。一名は昼勤とし、一名は夜勤とする。監視人は監視を命ぜられた感染家屋に対していかなる者も出入りしないよう厳重に注意しなければならない。もし職務を怠った場合は厳罰に処せられる。なお、監視人は当該家屋が必要とするような種々な用事を果たす任務を有し、もし用件のため他出する場合には、その家の錠を下ろし、鍵をみずから持参しなければならない。¹¹

「悪疫流行に関するロンドン市長ならびに市参事会の布告」の一部として示されたこの引用から明らかなことは、監視人の任務が個々人の身体の隔離と管理だということである。その任務が完全に遂行されることはおそらくなかっただろうが、ペスト流行を防ぐためにこのような「監視人」を各教区に配置し、その任務を事細かに規定することによって、ミシェル・フーコーのいう「遍在的で全知の権力」が夢想されていたことは間違いない。¹²

フーコーは『監獄の誕生』の中で、一望監視方式の前史として、17世紀末のペスト流行に対する監視のあり方に注目している。その特徴を一言でいえば、規律と訓練の導入である。フーコーは癩患者に対する排除の図式との対比から、ペストに対する絶え間ない監視、可視性の重要性を問題にする。

ペストが招きよせた事態とは、人々を一方と他方に区分する二元論的で集団的な分割であるよりむしろ、多種多様な分離であり、個人化をおこ

¹¹ ダニエル・デフォー『ペスト』平井正穂訳（中公文庫、1991）68.

¹² ミシェル・フーコー『監獄の誕生——監視と処罰』田村俣訳（新潮社、1977）200.

なう配分であり、監視および取締りの深くゆきとどいた組織化であり、権力の強化と細分化である。¹³

癩病の場合は、『狂気の歴史』にあるように、排除の原則が適用された。それは社会の外側へ患者を遺棄する仕組みであり、患者個人に細かい差異をつけて管理することは行われなかった。¹⁴ 彼らはただ追放されたのである。これに対して、ペストの場合は、デフォアの記述からもわかるように、監視人も含めて個人のすべての行動が監視の対象となっている。ペストという伝染病は人々の無秩序な接触がもたらす混乱状態であると考えられていたので、その解決策は個人の関係を身体のレベルで明白に捉えることに求められた。そして、この方策は実際にペストが猛威を振るっている時よりも平時の、つまりペストの危険を予感しながら生活している時の方が有効に作用すると考えられた。したがって、絶え間ない監視を行う権力は、全ての人を対象とし、(細分化された) 個々人に排除の可能性をちらつかせ、自主的な規律・訓練を強制する。ここには近代的な「公衆衛生」概念の誕生を確認することができる。「私」への配慮、細分化された規律・訓練は同時に集団としての公共の衛生を防衛することと表裏一体であったといえる。

では、ペストの流行にともなうこのような閉鎖性が、具体的に、コーヒーハウスにどのような影響を与えたのだろうか。

〔酒楼〕

料亭、居酒屋、コーヒー店、酒蔵における過度の痛飲は、当代の悪弊であるとともにまた実に悪疫伝播の一大原因であるから、嚴重に取り締まる必要がある。当市古来の法律と習慣に準じ、今後夜九時すぎ、いかな

¹³ フーコー、『監獄の誕生』200。

¹⁴ ミシェル・フーコー『狂気の歴史——古典主義時代における』田村俣訳（新潮社、1975）。

る者、またいかなる団体といえども、料亭、居酒屋、またはコーヒー店に出入りすることを許さない。違反者は当該法律に準じてこれを処罰する。¹⁵

デフォーの記述ではこのように、ペスト対策としてコーヒーハウス立ち入り禁止令が出されている。コーヒーハウスの存在そのものを否定するのではなく、個人を無秩序から分離せよという命令は、コーヒーハウスが監視の対象となったことを意味する。ペスト感染家屋に配置された〔監視人〕がここにも必要と考えられたのである。こうして「絶えざる監視」の目が向けられるこの公共圏は、新しい規律・訓練の実験場として機能していくようになる。

ペストとコーヒーハウスという二つの社会現象で重要なのは、公共空間をとりまく二つの力、開放性と閉鎖性、「人間のくるつぼ」と「規律・訓練による個人化」、没階層性と細分化された個人識別、ようするに一見すると相反する力が同時に存在していたという点である。¹⁶したがって、17, 18世紀の公共圏は、ますます拡大する「公」に対する関心と細分化される「私」への配慮によって支えられていたといえよう。

3

このような相反する方向性を確認した上で、次に、ハーバーマスの公共性概念とジェンダーの関係をみておこう。ここでは、フーコーの『知への意志』を参照し、公共圏におけるジェンダー、セクシュアリティの重要性について確認する。フーコーによれば、ジェンダー（婚姻の装置）とはおよそ次のよ

¹⁵ デフォー 76.

¹⁶ ハーバーマスの場合、公共圏における「私人」は公共の議論の主体であり（と同時に対象でもあるのだが）、公衆を構成する最小の単位として想定されているため、さらなる分割の可能性は認められない。これに対して、フーコーのいう規律・訓練の権力が作用する「個人」は、身体の細部まで監視され、また時間的にも分割されうる存在として提示されており、単なる分類上の概念とはいえない。

うなものである。

おそらくどのような社会においても、性的関係は婚姻の装置を産み出したであろう。すなわち、結婚のシステムであり、親族関係の固定と展開の、名と財産の継承のシステムである。この婚姻＝結合の装置＝仕組みは、それを保証する拘束のメカニズム、それが求める屢々錯綜した知と共に、経済のプロセスや政治的構造がもはやその中に適切な道具あるいは充分な支えを見出[だ]し得なくなるにつれて、その重要さを失っていった。西洋近代社会は、特に十八世紀以降、この婚姻の装置に重なりつつ、それを排除することなしにその重要さを削減するのに貢献することとなる一つの新しい装置を発明した。それが性的欲望の装置である。¹⁷

ここに述べられている婚姻の装置が旧来の権力の拠り所であるなら、私たちはここで癩病とペストの対比を思い浮かべることができる。排除の権力と規律・訓練の権力がそのまま婚姻と性的欲望の装置に対応するわけではないにしろ、二つの次元の異なる力が並存している点は重要である。セクシュアリティ（性的欲望の装置）は容易に固定化されるものではなく、婚姻の装置がもたらす二分法（合法と非合法）を越えて、あらゆる人間に作用する。それは個々人の関係性を問題にする装置である。「生殖＝再生産」によって維持される階級制度を軸に作動するのではなく、性的欲望の装置は、「増殖すること、いよいよ精密なやり方で、身体を刷新し、併合し、発明し、貫いていくこと」を推し進めるのだ。¹⁸

コーヒーハウスとセクシュアリティの関係についてはこれまであまり注目されてこなかった。だが、コーヒーハウスの隆盛に対する反対意見はかなり早い段階からなされていたことがわかっている。1674年、ロンドンでは夫が

¹⁷ ミシェル・フーコー『性の歴史Ⅰ 知への意志』渡辺守章訳（新潮社、1986）136。

¹⁸ フーコー、『性の歴史Ⅰ 知への意志』137。

コーヒーハウスに入り浸ってばかりいることに不満をいだく女性が『過度に酒を禁じ男性を弱くすることから女性に生じる大きな不便について世間の考慮を訴える、コーヒー反対の女性の請願』を出している。

The Occasion of which Insufferable *Disaster*, after a serious Enquiry, and Discussion of the Point by the Learned of the *Faculty*, we can Attribute to nothing more than the Excessive use of that Newfangled, Abominable, Heathenish Liquor called *COFFEE*, which Riffing Nature of her Choicest *Treasures*, and *Drying* up the *Radical Moisture*, has so *Eunucht* our Husbands, and *Crippled* our more kind *Gallants*, that they are become as *Impotent*, as *Age*, and as unfruitful as those *Desarts* whence that unhappy *Berry* is said to be brought.¹⁹

ここでは、コーヒーが男性に与える悪影響が述べられている。具体的には、コーヒーを飲みすぎる男性の性力が著しく低下している点を嘆く女性の訴えがここでは述べられているのだが、これに対して、男性は『女性のコーヒー反対の請願に対する男性の回答。女性が言語道断なパンフレットによってコーヒーにぶつけた不当な中傷を晴らす』と題した反論を行っている。

Coffee collects and settles the Spirits, makes the erection more Vigorous, the Ejaculation more full, adds a spiritualescency to the Sperme, and renders it more firm and sitable to the Gusto of the womb. . . .²⁰

¹⁹ *The Women's Petition Against Coffee. Representing to Publick Consideration. The Grand Inconveniencies accruing to their Sex from the Excessive Use of that Drying, Enfeebling Liquor. Presented to the Right Honourable Keepers of the Liberty of Venus* (London, 1674) 2.

²⁰ *The Mens Answer to the Womens Petition Against Coffee, Vindicating Their own Performances, and the Vertues of that Liquor, from the Undeserved*

女性の意見に真っ向から反対し、コーヒーによって精力絶倫となり子宝にも恵まれると男性は主張する。もちろん、こうした論争が実際に女性と男性の間でなされたとは鵜呑みにすることはできないだろう。ここでは、女性が本当にコーヒーハウスに対して否定的であったかどうかが問題なのではなく、コーヒーがセクシュアリティの問題として論じられていた点が重要だ。コーヒーハウスという公共圏は、階級を縦断するセクシュアリティへの関心とともに形成されたのである。

4

最初に確認したように、コーヒーハウスの最大の特徴は没階級性で、それが理想とした開放性が18世紀イギリスに公共圏を出現させ、18世紀のイギリス公共圏はその後、国民国家という想像的な共同体へとつながっていく。だが、次に確認したように、そこにはもう一つ重要な力が存在していた。それは、ミクロな視点による規律と訓練の精密化である。外へ外へと広がる公共圏のなかで、個人に対して権力が微細に作用する。この相矛盾する方向性を持った権力を、17、18世紀に誕生した小説は、フィクションとして表象していたのではないだろうか。階級とジェンダーとセクシュアリティは最初から小説のテーマであり、その複雑な力関係を読むことで近代的主体が形成されていく。ハーバーマスは次のように述べている。

……始めから文芸的に媒介された親密性、文芸化される主体性は、事実上、広い読者層の文学となり、公衆として寄り集まる私人たちは、読んだ事柄についても公共的に議論し、共同で推進される啓蒙過程の中へそれをもちこんでくる。『パメラ』が文壇に登場してから二年たつと、最

Aspersions lately cast upon them by their Scandalous Pamphlet (London, 1674)

初の公衆文庫が設立された。……イギリスの一七五〇年以來のように日刊新聞や週刊雑誌も二五年間に二倍の販売部数をもった時代に、小説を読むことが市民層の間で習慣になった。これらの市民層は、初期の喫茶店やサロンや会食クラブなどの施設からはとっくに脱却して、すでに新聞やその職業的批評という媒介機関によって結束させられている公衆を形成する。²¹

わずか百年足らずで、コーヒーハウスの公共圏は小説を生み出し、個人の主体化は小説によってなされた。先にみたように、コーヒーハウスは相互に連帯し、私人の社交を外部へと開いていた。しかし、今や「喫茶店やサロンや会食クラブなどの施設から」外部へと抜け出した市民は「文芸化されうる主体性」を描き出す小説を読むのである。²²

サミュエル・リチャードソンは書簡体小説『パメラ』で、主人公パメラの視点から、その内面心理を描き出しているが、物語のテーマは、結婚のシステムすなわちジェンダーの観点からみた階級の流動性である。女性主人公の姿をして登場する中流階級が虚構の公共圏において理想的な階級縦断を経験する。『パメラ』は一大現象となったが、パメラとB-氏の結婚で終わる結末は、当時大きな論争をひき起こした。

その中の一つが、ヘンリー・フィールディングによる『パメラ』のパロディ(『シャミラ』)であり、これもまた公共圏における「主体化」をめぐる一つの重要な反応である。次の二つの引用によって両作品に描かれているセクシュアリティのテーマを確認しておこう。

... the pretended She came into Bed; but quiver'd like an Aspin-leaf;
and I, poor Fool that I was! pitied her much.—But well might the

²¹ ハーバースマス 72.

²² ハーバースマス 72.

barbarous Deceiver tremble at his vile Dissimulation, and base Designs... and my Confusion, when the guilty Wretch took my Left-arm, and laid it under his Neck, as the vile Procuress held my Right; and then he clasp'd me round my Waist!²³

He was as rude as possible to me; but I remembered, Mamma, the instructions you gave me to avoid being ravished, and followed them, which soon brought him to terms, and he promised me, on quitting my hold, that he would leave the bed.

O Parson Williams, how little are all the men in the world compared to thee! My master was as good as his word.²⁴

前者はナイトキャップを被って暗がりに潜むB一氏の正体に気づかずに、パメラが床につく有名な場面で、彼女の美德はここで最大の危機をむかえる。女中に変装したB一氏はここで女中の介添えをえて、パメラをものにしようとするのだが、気絶したパメラを前にB一氏は怖気づき、結局レイプは未遂に終わる。フィールディングは『シャミラ』において第二の引用のようにこの挿話を解釈している。『パメラ』では、主人公は失神してしまい、主人によるレイプが未遂に終わったことすら彼女はわからないのだが、フィールディングはこの場面のパロディーとして、牧師に対する性的な告白をもってくることによって、オリジナルのパメラがエロティックに見えてこないかと読者に問いかける。ウィリアムズ牧師に比してなんて世の男どもが“little”であることかという彼女の不満はオリジナルのパメラがB一氏に抱く不安をフィールディング流に書き換えたものである。こうして、にせのパメラ

²³ Samuel Richardson, *Pamela; or, Virtue Rewarded*, eds. Thomas Keymer and Alice Wakely (Oxford: Oxford UP, 2001) 203.

²⁴ Henry Fielding, *Joseph Andrews and Shamela*, ed. Martin C. Battestin (Boston: Houghton Mifflin, 1961) 324.

(Sham+Pamela) はリチャードソンの描く中流階級の主体を「自由な」解釈に開かれた性的欲望に突き動かされる主体へと変えてしまう。

先に見たコーヒーハウスをめぐる男女の論争は、このように階級、ジェンダー、セクシュアリティの権力論として小説を捉えることを要求していたのだろうか。リチャードソンとフィールディングは様々な点で対照的な作家であるが、両者が読者に問いかけているのは、拡張し続ける公共圏の中で、いかに個人の主体化を実現するかという同じ問題である。そのために必要な視点、つまり自らが属する公共圏の本質を「見極める」語り（読み）が小説によって本格的に始められたといえるのかもしれない。ハーバーマスの公共圏がその開放性によって拡大し続ける過程で、閉じ込められた個人の内面に作用する監視の目は、これ以降ますますセクシュアリティに比重を移しつつ、その精度を増していく。したがって、コーヒーハウスに認められる閉鎖性は伝統への回帰であるというよりはむしろ、新たな権力=関係の出現とみなすべきだろう。ハーバーマスとフーコーの議論を重ね合わせることによって 18 世紀の公共圏をより多元的に検討しつづけていかなければならない。